

津波で放射能で 地域と命運共に

福島県の太平洋側最北端、新地町のバッティングセンターは津波で破壊されていた。南相馬市の店は震災後、人知れず閉鎖。いずれも福島第二原子力発電所から、さして遠くない場所にあった。間違ってもマスメディアが報じることのない、原発周辺のバッティングセンター事情をお伝えする。

(バッティングセンター研究家・吉岡雅史)



海から「好打バッティングセンター」の跡地にかけて、津波被害は一目瞭然

3 年の歳月を経て、海辺の小さな集落はようやく、

がれきの撤去が済んだだけだった。宮城との県境にある新地町には、津波が押し寄せるまで「好打バッティングセンター」が存

在した。真裏の高台に建つ住宅は無傷である。

地元の釣師浜漁港は、ヒラメやカレイの好漁場だったという。漁港から歩いて5分とかならない場所にバッティングセンターがオープンしたのは、震災の2年ほど前だった。「お世辞にも繁盛していたとはいえない」と、地元の人たちは口をそろえる。

がれきは姿を消したとはいえず、一帯はまだ更地にもなっておらず、コンクリートの基礎が残されたまま。基礎に埋め込まれたワイヤーに、かろうじて防球ネットの切れ端が食い込んで

いたから、バッティングセンターの跡地と判別できる。打席数も3〜4程度、奥行きや幅も短いことは一目瞭然だ。

もともとが朝早い漁師町ゆえ、筆者が現地を訪れた昼下がりに、外には人通りはおろか車も通らない。辛うじて高台の旧家でおばあさんがコタツでうつらうつらしているのが見えた。

「津波が来たとき、店の人は避難して無事だったはず。野球のことはよく分らんが、ボールを打つ音は家の中まで聞こえてきた。」

夕方や休日の日中には、金属バットで軟式ボールを弾いた際の「パコーン」という独特の打撃音が、潮風に乗って近隣住宅に鳴り響いていたことが、おばあさんの話で分かった。経営者も客も無事だったことは、不幸中の幸いだった。荒野のような新地町を後にし

は、原発事故しかありえない。

南相馬の中心部、旧・原町市は福島第一原発から約30キロ。避難区域指定からは免れている。しかし、原発事故直後に桜井勝延市長がYouTubeを使って、救済物資が届かない窮状を訴えたことは、世界中に広がった。

暮れどきの市役所はあたたかだ。わたしもさうだった。隣接するいかにも暇そうな青年会議所の事務局で現地の事情を聞いた。やはり他の被災地同様、放射能を恐れた親が子どもを外出を長らく控えさせる傾向は強かったという。

て、南を目指す。ダンブカーが頻繁に往来するため、海沿いの道路は常に砂埃がたつ。舗装も所々傷んだまま。走行距離は30キロほどだったが、南相馬市まで1時間近くを要した。

平成の大合併で誕生した南相馬市は「相馬野馬追」で知られる。起源は、平将門が野生馬を敵に見立てて行った軍事訓練とされ、東北六犬祭の一つに数えられる。

そのメイン会場の祭場地と目と鼻の先に「バッティングセンター野球屋」の廃墟があった。貼り紙もなく、一見、休日に見えなくもない。しかし、天井部のネットが垂れ下がっている。これが営業していない証拠だ。もちろん台風通過や豪雪に備え、建物への負担を軽減するためにネットを下げるケースはあるのだが、そうした緊急時の垂れ下がりは明らかに異なっていた。バッティングセンターばかり巡っていると、些細な違いさえ分かってしまう自分に感心してしまう。

せっかく来たというのに閉店は残念極まりないし、なにより理由が不明なのもどかしい。経営不振なのか、原発事故の影響なのか…。近くにバス会社があったので、駐車場にいた運転

「子ども客の減ったことが響いたのでは」。事務局の青年も、先に聞き込んだバス会社の女性も、同じ推測を口にした。

人が減り、生活が再建途上にある限り、地域に根差した存在であるバッティングセンターのような娯楽施設の復活など、容易なことではない。

それでも、たかがバッティングセンター、されどバッティングセンターである。子供も大人も一心不乱にボールを打てる、なにげない日常が戻ってこそ、真の復興が果たせたというものだろう。その日が来るのを、見守ろうと考えている。

手数人に聞いてもラチが明かなかった。ところが、事務所でもパソコンに向き合っていた30代後半とおぼしき女性社員だけが反応してくれた。

「震災後いつの間にかつぶれてました。結構子どもでにぎわってましたよ。私もよく通ってたクチなんですけど。オフィス内にいた男性陣から笑みがもれた。

バッティングセンター周辺は震度5弱、海岸線から離れていることから、震災・津波が無関係なのは明白だ。そうなる、屋号からも相当の野球好きの店主が経営していたであろうバッティングセンターが閉鎖された原因

原発事故の影響で閉店を余儀なくされた「バッティングセンター野球屋」

